

福州第一中学校出身の中国人留学生に対する日本語補習の試み —e ラーニングプログラム及びバディ・システムを利用して—

Supplementary Classes for Chinese Students from Fuzhou No.1 Middle School
—with using e-learning programme and buddy system—

谷口 正昭
Masaaki TANIGUCHI

俞 嶸
Rong YU

(平成20年10月8日受理)

要旨

静岡産業大学情報学部では、毎年中国福州第一中学校から直接入学の形で留学生を受け入れている。福州第一中学校出身者には全員、渡日前の日本語学習が義務づけられているが、本国における学習期間が十分ではないことから、これまで入学時の日本語力の不足が様々な方面から指摘されていた。そこで、2008年度入学の福州第一中学校出身の留学生9名に対し、e ラーニングプログラム及びバディ・システムを利用した約5か月間の「日本語補習」を試みることとし、学部の講義と並行して行う「日本語補習」の可能性を探った。

1. はじめに

静岡産業大学情報学部においては、1998年度（2名受け入れ）から中国福州第一中学校出身の留学生を直接入学させており、その数は年々増加の一途をたどっている（2008年度入学者12名）。福州第一中学校出身の入学者には、本国における渡日前日本語学習を義務づけているが、日本語環境にない外国での学習であり、その期間も正味約6か月間と短いことから、入学時の日本語力は十分なものではなく、学生数の増加とともに適応に遅れをとるケースが多く見られるようになってきた。これまで本学では、他の留学生と同様、福州第一中学校出身者を、入学と同時にそのまま学部の講義に参加させる形をとっていたが、本年は、試みとして二つの形態で「日本語補習」を行い、その可能性を検証することとした。一つは、e ラーニングプログラムを利用した「日本語補習」であり、もう一つは、バディ・システムによる「中国語を学ぶ日本人学生とのペア学習」である。

2. 学習者の状況

2008年度入学の福州第一中学校出身者は12名であり、2007年4月から福州大学外国語学院及び廈門（アモイ）大学外文学院において、『総合日語』（北京大学出版社）を主教材とした正味約6か月間の日本語予備教育を受け、中級前期までの学習を終えて本学に入学している。

2008年度は、「日本語能力試験」の2級に合格して来日した者も5名おり、スムーズに

留学生生活をスタートさせることができた学生もいるが、日本国内の教育機関において1年半から2年間の日本語教育を受けて入学する他の留学生に比べると、圧倒的に「聴解力」「会話力」が不足しており、入学当初の日本語力には歴然とした差が見られる。

3. 「日本語補習」の形態

上記のような状況から、2008年度は、特に日本語能力が不十分であると思われる福州第一中学校出身者9名を対象にして、学部の講義と並行する形で「補習」を行うこととした。そして、これを効率的、効果的に行うために、

- ① eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」（谷口担当）
 - ② バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」（兪担当）
- を試み、その可能性を探ることとした。

4. eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」（谷口担当）

4-1 eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」の概要

現在情報学部では、国際情報学科、情報デザイン学科に在籍する全留学生を対象とした「日本語（必修科目）」については「能力別クラス編成」を取っており、1年次はA、B、Cの3クラス体制で授業を行っている。

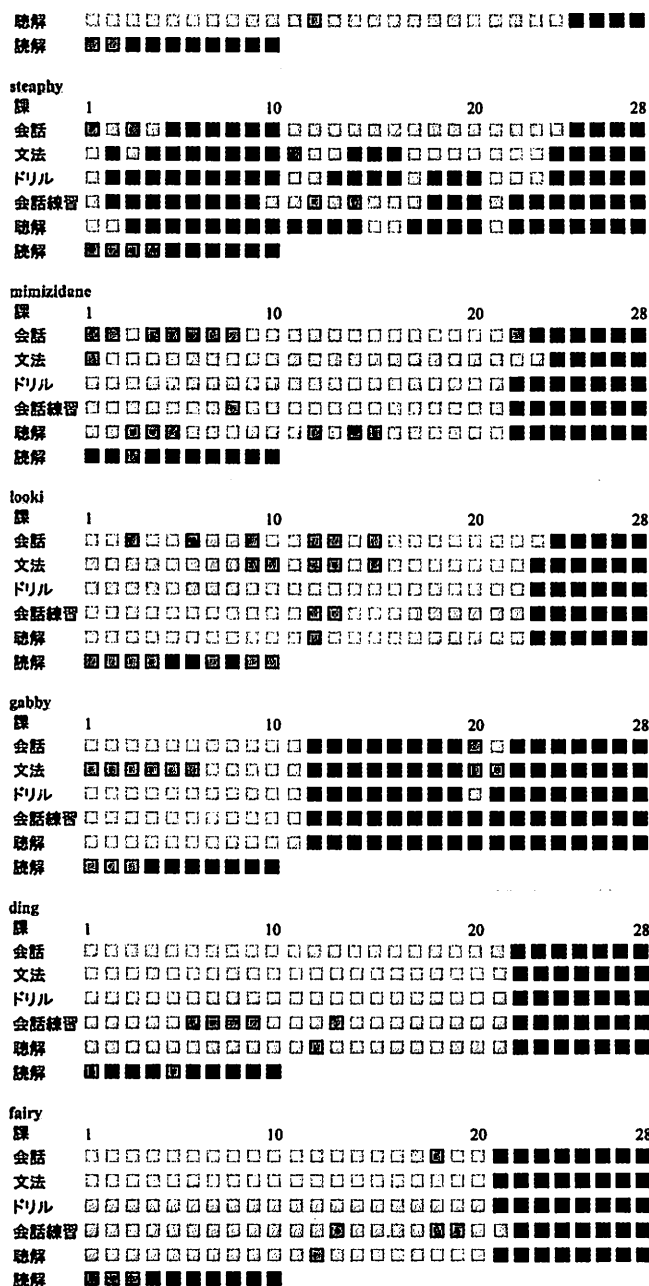
今回行った「補習」は、「日本語」Cクラスに在籍する福州第一中学校出身者5名（2007年「日本語能力試験」2級の平均点…189.8点／400点満点）を対象としたものであるが、上位クラスに在籍する福州第一中学校出身者についても補習への参加を認めたため、学習者は合計9名となっている。

補習期間は、4月の最終週から10月までを予定し、原則として週3コマ（1コマ90分）のコアタイムを設けて研究室において「補習」を行い、並行してeラーニングプログラムを利用した学習を課することとした。

対象者	福州第一中学校出身の留学生9名（Cクラス在籍者5名＋希望者4名）
期 間	4月下旬から10月上旬まで（8月第3週を除く）
時間数	約100時間（原則として週3コマ）＋eラーニングプログラムを利用した学習
場 所	研究室

4-2 eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」の方針

今回の試みの目的の一つに、eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」の可能性の模索があることから、基本方針として全員が東京外国語大学留学生日本語教育センター開発のe-learning system “JPLANG”（“JPLANG”は、Web上で日本語学習を可能にした無料のシステムであり、教材と学習管理機能の両方を有していることが、大きな特長となっている。東京外国語大学日本語教育センター編著『日本語初級』〔文型324 語彙2,000語 漢字600字〕及び『日本語中級』〔文型220 語彙2,400 漢字616〕に合わせて作成されており、今後、『日本語上級』に関する教材の公開も予定されている。）を利用する



12 ⇒

クレジット(Credit) | プライバシーポリシー(Privacy Policy) | 使い方 | How to use | How to do an assignment | お問い合わせ(Inquiry)

図 1 学習者の学習進捗確認の画面

4-3 eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」の状況

今回行った「日本語補習」は、学習者自身が自らの日本語能力の不足を強く自覚し、半ば自主的に参加するものであったことから、「補習」への出席率は極めて高く、また、その受講態度も真摯なものであった。本教材を使用しての日本語教育には、約300時間の学習時間が想定されているが、研究室における「補習」時間の全てを「口頭練習」に充て、他を“JPLANG”による自習とすることにより、およそ100時間で最終課（28課）に到達することができた。学習者は本国で6か月間の学習を終えているわけであるが、今回はあえて「初級」を総ざらいするかたちで「補習」を行った。これは、基本的な文型、文法を着実に身につけることが、将来の飛躍につながるとの確信の上で行ったことであるが、専ら「口頭練習」に重点を置いたためか、学習者は特に不満を表明することもなく、すべての「れんしゅう」に集中力をもって丁寧に取り組んでいた。

“JPLANG”を使用した学習については、WEB上にてその進捗状況がチェックされることもあり、おおむね進度に合わせて行われていることが見て取れた。学生によっては、パソコンの環境等に問題があり、その学習に偏りが見られることがあったが、いつでもどこからでもアクセスでき、スケジュールに合わせて学習を進めることができるシステムであるので、自らの理解度を試すための「補助教材」としては有効であったと思われる。今回は「録音」機能は使用しなかったが、音声に伴う教材であることから、「発音」「イントネーション」のチェックや「聴解力」の養成手段としても活用されていた。

5. バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」（兪担当）

5-1 バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」の概要

現在情報学部では、外国語科目として「中国語」が開講されているが、受講生の日本人学生が日常生活の中で中国語を使用する機会は皆無に近い。また、中国人留学生も入学当初は、日本語力の不足から日本人学生に対して質問をしたり、話しかけたりするということが、ほとんどできずにいる状況がある。そこで、「中国語」を選択して学ぶ日本人学生と来日間もない中国人留学生との相互学習の場を意図的に設定することにより、お互いが自主的にそれぞれの語学力を高め合い、相互に交流を行う機会を提供することができないかと考えた。

今年度行った「ペア学習」の実施にあたっては、昨年度、中国人留学生17名（うち福州第一中学校出身者9名）と日本人学生23名を対象にした以下のようなアンケートを行い、その要望があるかどうかを予備調査している。

1. あなたは語学ペア学習に参加したいと思いますか？
 ①思う ②どちらかという思う ③どちらでもいい ④どちらかというと思わない ⑤思わない
 ~~~~~ ⑤以外と答えた人は下に進んでください。 ~~~~~
2. あなたは語学ペア学習の学習相手を固定したいと思いますか？  
 ①思う ②どちらかという思う ③どちらでもいい ④どちらかというと思わない ⑤思わない
3. あなたは語学ペア学習の勉強時間を固定したいと思いますか？  
 ①思う ②どちらかという思う ③どちらでもいい ④どちらかというと思わない ⑤思わない
4. あなたは一週間何時間語学ペア学習をしたいと思いますか？  
 ①90分 ②90分×2 ③90分×3 ④90分×4 ⑤90分×5

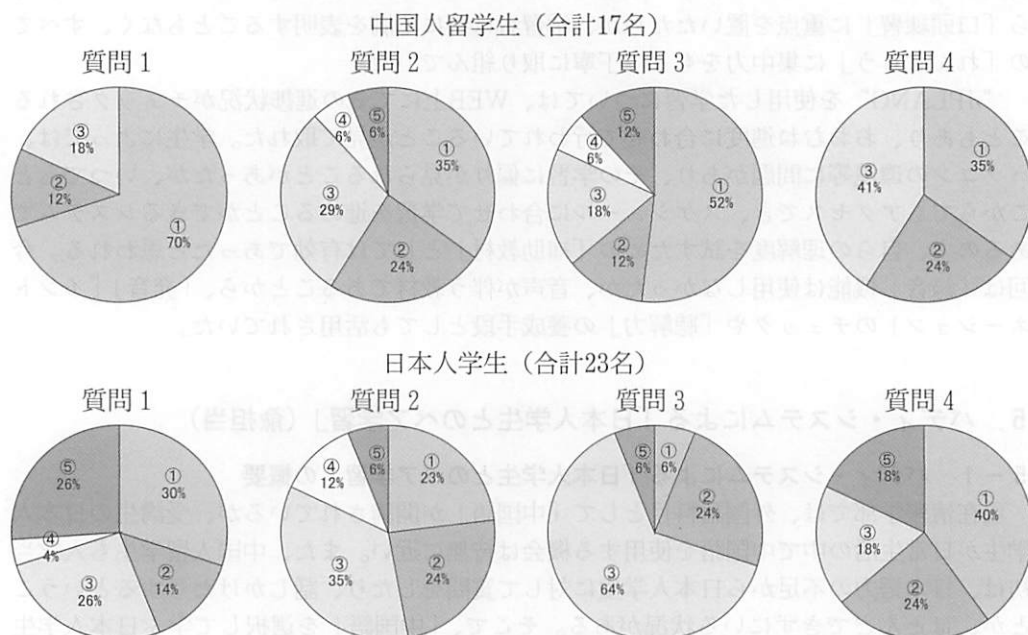


図2 語学ペア学習に関するアンケート調査結果

アンケート調査により、「ペア学習」に参加したいと明確に考える（①思うを選んだ）中国人留学生は70%にも達しており、日本人学生においても参加したいと考える（①思うと②どちらかという思うを選んだ）学習者が半数近くを占めることが分かった。「ペア学習」に対して、中国人留学生はきわめて前向きであり、日本人学生も一定の興味を示していると言える。

学習相手を固定するかどうかについて、中国人留学生と日本人学生のいずれも、固定したいと考える（①思うと②どちらかという思うを選んだ）学習者は半数に達しており、固定したくないと考える（④どちらかというと思わないと⑤思わないを選んだ）学習者の数をはるかに上回っている。

学習時間を固定するかどうかについて、中国人留学生のうち、固定したいと考える（①思うと②どちらかという思うを選んだ）学習者は64%に達している。日本人学生では、

固定したいと考える学習者は30%であるが、固定したくないと考える（④どちらかというと思わないと⑤思わないを選んだ）学習者の数を上回っており、総じて学習時間を固定したいと考える傾向が見られる。

ペア学習の頻度については、中国人留学生と日本人学生のいずれも、週1回か2回が良いと考える学習者が60%前後であり、大半を占めている。

以上の調査結果を踏まえ、2008年度はこのスタイルのペア学習を「バディ・システム」と名づけ、以下のような内容でその可能性を模索することとした。

対象者 福州第一中学校出身の留学生9名と「中国語」を選択する日本人学生9名  
期 間 4月下旬から10月上旬まで  
時 間 週に1度から2度  
場 所 ゼミ室等

### 5-2 バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」の方針

この試みの主な目的は、ネイティブスピーカーとの自由な会話において、「暗記」や「練習」によって身につけた様々な文型や語彙を実践的に使用することにある。学んだ言語を実際に使用することによって更なる向上心、学習意欲が芽生えることを期待し、以下のような方針で中国人留学生1人と日本人学生1人が「ペア学習」を行う「バディ・システム」を設定することとした。

- ① アンケート調査の結果と学生のスケジュールを総合的に考慮し、「ペア学習」の相手と時間を固定し、頻度は基本的に週1回から2回とする。
- ② 「ペア学習」は教員が立ち会わない状態で行うため、学習が開始する前、学生のレベルとリクエストに応じて個別に学習内容や方法を指導する。学生は「中国語」や「日本語」を教員と同じように教えることは不可能であるため、何についてどのように学びたいかを積極的に考えて相手に伝えるよう、指導する。
- ③ 学生主導型の自由な学習スタイルがモチベーションの向上に繋がり、「ペア学習」自体を継続する上で重要な要素であると考え、学習スタイルは学生自身が決めることとする。
- ④ バディ・システムの管理者である教員は定期的に「ペア学習」を行う学生にヒアリングを行い、学習状況をチェックする。必要に応じてペアの組み合わせ、時間、場所等を調整し、学習相手とのコミュニケーションが円滑に図れるよう、適当な助言を行う。

### 5-3 バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」の状況

今回の試みでは、9名の福州第一中学校出身者による9組のペアを設定することができた。その多くが週に1、2回、定期的にゼミ室や学内、学外の適当な場所で「ペア学習」を行っており、それぞれが身につけた言葉を間違いを気にせずに実際に使用してみるという経験を通し、また、教員のいないところで同年代の若者同士の気の置けない会話を楽しむことによって、教室内では得られない充実感を味わったようである。お互いのスケジュールが合わず、継続的な学習を断念したグループもあったが、そのほとんどが今後も継続し

て「ペア学習」を続けたいという意思を表明していることから（後述、「アンケート」結果参照）、一定程度の効果が見られたと考えて良い。

## 6. 学習者による評価

「補習」対象者全員に今回試みた「日本語補習」について、以下のような無記名アンケートを実施した。人数はその回答者数を示している。

### 「日本語補習」についてのアンケート

\* 質問の回答基準は次のとおり。

|           |   |          |   |
|-----------|---|----------|---|
| 強く思う      | 4 | そう思う     | 3 |
| あまりそう思わない | 2 | 全くそう思わない | 1 |

#### A. eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」について

あなたがこのプログラムに参加した理由は何ですか。（自由記述）

→基礎的なことをもう一度勉強して、日本語のレベルをもっとアップするため。日本語が上手になりたいから。日本語が下手だから。日本に来る前にあまり勉強できなかったから。

① あなたはこのプログラムに意欲的に参加しましたか。

4 (8人) 3 (1人) 2 (0人) 1 (0人)

② 昨年まではこのようなプログラムはありませんでしたが、「補習」は必要だと思いますか。

4 (8人) 3 (1人) 2 (0人) 1 (0人)

③ 基礎的なことからもう一度勉強しましたが、このやり方はいいと思いますか。

4 (6人) 3 (3人) 2 (0人) 1 (0人)

④ 「補習」では「口頭練習」だけをして、ほかのことはeラーニングシステムを使ってしましたが、このやり方はいいと思いますか。

4 (3人) 3 (6人) 2 (0人) 1 (0人)

⑤ eラーニングプログラムは、「補助教材」として有効だと思いますか。

4 (3人) 3 (6人) 2 (0人) 1 (0人)

⑥ 一週間に3回行いましたが、回数はちょうどいいと思いますか。

4 (6人) 3 (3人) 2 (0人) 1 (0人)

⑦ 『初級』の補習が終わりますが、『中級』の「補習」にも参加したいと思いますか。

4 (8人) 3 (1人) 2 (0人) 1 (0人)

このプログラムについて何か意見があったら、書いてください。（自由記述）

→文法についてもっと教えてもらいたい。会話をもっと練習したい。このプログラムはいいと思う。



## B. バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」について

あなたがこのプログラムに参加した理由は何ですか。(自由記述)

→日本語が上手になりたいから。日本人の友達を作りたいから。日本人の習慣を知りたいから。日本語を使って日本人と話してみたいから。日本人と接触したいから。

① あなたはこのプログラムに意欲的に参加しましたか。

4 (6人) 3 (3人) 2 (0人) 1 (0人)

② 昨年まではこのようなプログラムはありませんでしたが、「日本人学生とのペア学習」は必要だと思いますか。

4 (5人) 3 (3人) 2 (1人) 1 (0人)

③ 今回の「日本人学生とのペア学習」の方法はいいと思いますか。

4 (5人) 3 (3人) 2 (1人) 1 (0人)

④ 相手の日本人との「ペア学習」はうまくいきましたか。

4 (2人) 3 (4人) 2 (3人) 1 (0人)

⑤ 「日本人学生とのペア学習」は日本語力をつけるために有効だと思いますか。

4 (2人) 3 (6人) 2 (1人) 1 (0人)

⑥ 二人で決めた回数はちょうどいいと思いますか。

4 (6人) 3 (2人) 2 (0人) 1 (0人)

⑦ これからも「日本人学生とのペア学習」をしたいですか。

(今回、うまくできなかった人は、これからまた、違う人としてみたいです。)

4 (6人) 3 (2人) 2 (1人) 1 (0人)

このプログラムについて何か意見があったら、書いてください。(自由記述)

→日本人とコミュニケーションが取れて良かった。中国語の教え方が分からないので、困ってしまった。中国語の教科書があれば、もっと良かった。

## 7. まとめ

アンケート調査の結果からは、おおむね高い満足度を得られたことが分かるが、eラーニングプログラムを利用した「日本語補習」については、

① 対面での「補習」の内容を「口頭練習」に限ったことについて、いいと思うか。

② eラーニングプログラムが「補助教材」として有効であると思うか。

という2点に関して、「そう思う」という回答をした学習者が「強くそう思う」という回答をした者より多くなっている。前者については、その方法、内容の一層の工夫と改善を、後者については、今後行う予定である『中級日本語』の「補習」において、eラーニングプログラムを利用した方法を更に検証していく必要があると考える。

また、バディ・システムによる「日本人学生とのペア学習」については、

① 相手の日本人との「ペア学習」はうまくいったか。

② 「日本人学生とのペア学習」は日本語力をつけるために有効であると思うか。

という2点について、「そう思う」という回答が「強くそう思う」という回答を上回った。

特に、前者については、「あまりそう思わない」という回答をした学習者が3名おり、「⑦これから「日本人学生とのペア学習」をしたいですか。(今回、うまくできなかった人は、これからまた、違う人としてみたいですか。)」という質問の「強くそう思う」「そう思う」を合わせた回答者が8名もいることを考えると、その原因がどのようなところにあったのか詳細な調査を行い、学生の期待と現実がうまく合致するようなプログラムに改良していく必要がある。

## 8. 今後の課題

今回、少ない補習時間数と限られたスタッフによって効率的、効果的な「補習」が行えるかどうか、二つの形態を通してその可能性を探った。教員がそれに多くの時間を費やすことができない状況にある中で試みた苦肉の策ではあったが、ある程度の学生の満足は得られた。本国での日本語学習時間の短い留学生を、直接「学部生」として受け入れるからには、いくら優秀な学生を選抜したとしても入学後に何らかの手当てが必要となることは言うまでもない。今後は、正規のカリキュラムの中に海外からの直接入学者のための日本語教育支援プログラムが組み込まれるよう、関係各所に働きかけながら、より効率的な「補習」のあり方を模索していきたいと考えている。

## 参考文献

- 藤村知子 (2007) 「e-learning system JPLANGを使った音声課題配信・回答送信について—1問1答形式の初級段階『話し方』の場合—」東京外国語大学留学生教育センター論集33
- 芝野耕司 (2008) 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (GP) e-日本語—インターネットで広げる日本語の世界— (平成17～平成19年度) 成果概要」東京外国語大学現代GP成果報告書
- 佐野洋、藤村知子、林俊成、芝野耕司 (2004) 「多言語対応・初級日本語e-learningシステム教材の開発」CIEC (コンピュータ&エデュケーション) 会誌